

## 「竹取物語」を多面的に読む ～視点を変えて読み解く問いの設定～

上川寛子

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: [hi\\_kamikawa@tottori-u.ac.jp](mailto:hi_kamikawa@tottori-u.ac.jp)

**KAMIKAWA Hiroko**(Tottori University Junior High School ): **Reading "Taketori Monogatari" from Multiple Perspectives—Setting Questions to Read from Different Perspectives.**

要旨 — 平成 29 年告示の学習指導要領では、古典に親しむことが重視されている。本実践では、「竹取物語」を小さい頃に楽しんだ昔話「かぐや姫」の延長として読むのではなく、新たな視点を持って読ませるため、物語の背景やエピソードの意図に目を向けさせる問いを設定した。小グループを活用し、自由に話し合いをさせると、既存の知識や体験を生かして多面的に読み解き、新たな考えを形成しようとする姿が見られた。

キーワード 竹取物語, 古典に親しむ, 非定型問題, アクティブ・ラーニング

**Abstract** — In the Courses of Study announced in 2009, emphasis is placed on familiarity with the classics. In this practice, we did not read "Taketori Monogatari" as an extension of the old tale "Kaguyahime" that we enjoyed in our childhood, but rather we set questions to make students look at the background of the story and the intention of the episodes in order to read the story with a new perspective. When we had the students discuss the story freely in small groups, we found that they tried to form new ideas by reading the story from multiple perspectives, making use of their existing knowledge and experiences.

**Key words** — Taketori Monogatari, familiarity with classics, atypical questions, active learning,

### 1. はじめに

#### 1.1. 古典学習に求めるもの

平成 29 年告示の学習指導要領では、古典の学習に関して「小学校での学習を踏まえ、中学校においても引き続き親しむこと」が重視されている。中学 1 年生では、小学校から親しんできた様々な古典の作品に結び付けることで、古典の世界についての新たな興味・関心を喚起し、古典に親しませることが大切であると述べられている。生徒たちは、小学校では音読を中心として古典に触れている。中学校では、小学校の学習の上に、内容についても取り組みやすい工夫や、興味を持たせる工夫をしながら古典の学習を進める必要がある。

#### 1.2. 研究の目的

生徒は、中学に入って初めての古典教材である「伊曾保物語」を学習したところである。「伊曾保物語」はイソップ物語がもとになっており、短くまと

まった話であるため、生徒にとっては取り組みやすい教材である。古文と初めての出会いでもあり、古文のリズムに慣れるため、音読練習を中心に行った。その上で、現代語訳をもとに内容理解を行った。その後、中学 1 年生 141 名を対象に行った古典に関する事前アンケートでは、古典が「好き」または「どちらかという好き」と答えた生徒は 87 名(未回答 19 名)であった。その理由を見ると、大半の生徒は昔の言葉の意味やリズムに触れた楽しさを挙げている。一方で、「嫌い」または「どちらかという嫌い」と答えた生徒の理由としても、読みづらさや意味の分かりにくさ等古文の言葉の難しさを挙げている。これは、古語と普段自分たちが使っている言葉の違いを考えると当然であり、古典を自分たちになじまないものと感じているとも言えそうである。しかし、本来古典は、それぞれの時代で必要とされ、重んじられてきたから現在まで残ってきたのである。その古典の面白さを、生徒

たちにも感じてほしいと考えた。

坂東(2010)は、中学生が古典の授業を嫌う主な理由のうち「何のために学習するのかよく分からない」「現代の生活とかけ離れていて実感がわからない」という2点について、「既存の知識や教養として古典を学ぶのではなく、学習者が主体的能動的に学ぶ過程で古典学習の意義を実感し、古典と自己との関わりを意識化する学習のあり方を明らかにすること」が解決法であると述べている。

自身も、古典を、現代においても読む価値があるもの、自分と関わるものと捉えられるよう、新たな見方を獲得したり、現代とつながるものとして読んだりできる活動の工夫を目的として「竹取物語」の実践を行った(2021)。しかし、問いの設定に関しては、多くの割合が割かれている5人の貴公子についてあまり触れておらず、文章全体を通しての意図を十分に捉えられる問いにはなっていなかった。そこで、人間の物語としての「竹取物語」ということの意味を踏まえ、より包括的に物語の意図が考えられるよう、改めて一貫性のある問いの設定を行う。

自ら読み進める中で、多面的に内容を考えていくことが面白さや楽しさにつながって古典への抵抗感を減じることができ、古典を自らに関わるものとして受け取ることができるのでないだろうか。

本実践は、生徒が主体的に考え、古典の意義を実感できる問いの設定と、その効果を検証することを目的とする。

### 1.3. 研究の方法

本実践は、中学1年生141名を対象に行った。検討にあたって、中心となる問いに対し、授業後、改めて考えたこと、考えさせられたことを自由記述させ、その活動が生徒にとって、どのような意味を持って捉えられたかを探ることとした。また、授業後、改めて「竹取物語」の面白さを記述させ、生徒の思考が、どのように広がったのかを把握した。

## 2. 授業の実際

### 2.1. 「竹取物語」について

「竹取物語」は、昔話の「かぐや姫」として比較的身近な物語である。しかし、竹村(2002)は、「竹

取物語」と「かぐや姫」との近似性を出発点に授業を行うことで、「竹取物語」を非現実的な空想物語として矮小化することの危うさに言及している。そして、「古典に親しむ態度」を裏打ちするのは、「竹取物語」が、「時世」を経た現在においても「清新な魅力と豊かな創造的契機」を発見していく過程を軸に授業を構想することであり、「竹取物語」を「かぐや姫」とは異なる言語宇宙を構成している1テキストとして扱うことだと述べている。

「竹取物語」を通して古典に親しむ学習の工夫として、細田(2021)は、古文・漢文・現代的な視点を通して「月」の存在について考え、それを「竹取物語」に生かすことで、生徒の興味・関心を高めている。また、朝川(2016)は、他の古文・漢文に表れた「月」の表象や、月の「愛でる／忌む」といった両義性を確かめ、「竹取物語」において「月」が鍵となることを示している。いずれも角度を変えて「竹取物語」を読み解いていこうとするものであり、それにより読解を深化することの有効性を示唆している。

### 2.2. 問いの設定

本実践では、昔話「かぐや姫」との相違点に着目し、問いを設定する。

昔話自体、子どもに分かりやすく、楽しめるように書かれているものであり簡潔にまとめられている。非現実な設定、5人の貴公子の失敗などエピソード自体に面白みが感じられる部分が考えられるが、その面白さを直接扱うのではなく、例えば、その設定の意図や効果、背景を考える等、新たな視点の発見をねらいとして問いを設定しようと考えた。そうすると、細田、朝川が言うように、「月」について触れなければならないだろう。そもそもなぜかぐや姫は月から来たのか。月の世界と地上の世界はこんなにも違うのか。なぜ、地上に来ることが罪を償うことになるのか。「月」の設定は、物語にとっての大前提である。まずは、その大前提について、生徒の考えを形成した上で、後の授業を形作っていく。そして、前回の自身の授業では大きく扱わなかった、5人の貴公子のエピソードである。そもそも、このエピソードは何のために入れられたのか。物語全体にとって、どう関わっているのか。古文を

批評の観点から眺め、問いを設定することとした。物語の設定となっている部分や、面白みのあるエピソードが、物語の中でどのような役割を担っているのか、視点を変えて読むことで、幼い頃から慣れ親しんできたはずの物語も、様々な解釈が生まれる。そして、それが古典を学ぶ楽しさにつながることを期待して授業を構成することとした。

事前アンケートでも、「教科書『竹取物語』を読んで初めて知ったこと、驚いたこと、不思議に思ったこと」を記述させた結果、以下のような項目について述べられていた。

- ・羽衣を着ると心が変わること
- ・月に帰って行ったこと
- ・5人の貴公子の難題に関わる細かい設定
- ・不死の薬
- ・かぐや姫の罪
- ・富士山の由来

これらの生徒の意見は物語の設定について関わるものであり、その意図を問うことは生徒の興味・関心に沿うものであると考えられる。

問いの設定において、生徒の既有知識を利用して自分なりに考えを構築していけるような「非定型問題」(藤村 2008)を設定することで、生徒にとって取り組みやすく身近な課題として考えさせた。

具体的な問いとしては、主に次の3点である。

- ① 当時の人にとって、「月の世界」とはどのようなものだろうか。
- ② 5人の貴公子たちの姿から、人間のどんな面が見えてくるか。
- ③ なぜ帝は不死の薬を焼かせたのか。

以上のように、物語の設定やそれぞれのエピソードが持つ意味について考えられるよう問いを設定し、多面的に古典を読み解いていくことをねらいとした。その過程では、忌憚のない意見が出るよう、3人を基本とした小グループでの話し合いを活用した。

### 2.3. 学習計画

- 第1時 「竹取物語」について知る。  
初発の感想を書く。
- 第2時 冒頭部分の音読練習をする。  
古文の基礎知識を確かめる。

- 第3時 月の世界と地上の世界の違いについて考える。
- 第4時 5人の貴公子の共通点や失敗の原因を考える。
- 第5時 別れの場面を読んで、かぐや姫と帝の心情を考える。
- 第6時 「竹取物語」が語り継がれてきた理由を考える。

### 2.4. 活動の様子と生徒の反応

#### 2.4.1. 1つ目の問いについて(第3時)

第3時では、「月の世界」がどのような世界に設定されていたかを考えさせた。事前のアンケートからも、生徒は、「かぐや姫が月の都の人だということ」「人間とは心が違うこと」「不死の薬を持っていたこと」等、月の世界の設定に関わる部分に着目している。では、なぜかぐや姫を、月の都の人としたのか。その意図に目を向けさせるため、月の世界と地上の世界の違いに着目させた。前時では、冒頭部分からかぐや姫の様子を読み取り、かぐや姫の不思議な様子を確認している。そこから、月の世界に目を向けることとした。

#### 発問①

『月の世界』と『地上の世界』にはどのような違いがあるか

生徒は、教科書の現代語訳や解説部分を読み、相違点を見つけていった(図1)。

月の世界について、「不思議な力がある」「不老不死」「美しい」「物思い(人の感情)がない」等、地上の世界と比較し数多くの相違点が挙げられた。中でも、「感情がない」という点に、生徒たちの関心は集まった。「こんな世界嫌だ」という言葉が、どのクラスでも聞かれた。そこで、「苦しいことがあっても地上の方がよいのか。」と切り返した上で、

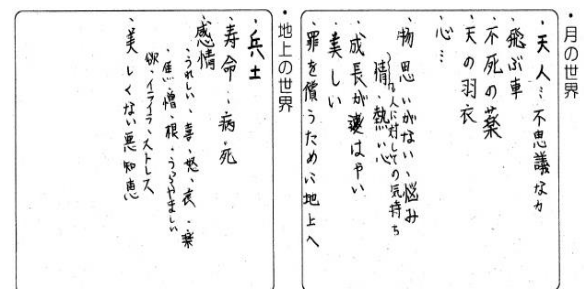


図1 「月の世界」と「地上の世界」の比較

「どちらの世界に住みたいか。」と聞いてみた。

### 発問②

『月の世界』と『地上の世界』のどちらがよいか。」

小グループを活用し、自分ならどちらに住みたいか、理由を伝えながら議論させた。議論の後、小グループで出た意見を全体で共有した。「月の世界」がいいと考えた生徒の意見としては、「地上より発展した生活の方がよい」「苦しいことがない方がいい」「嫌なことがないから幸せ」といったものであった。一方、「地上の世界」がいいと考えた生徒の意見としては、「感情がないと、喜びや楽しいという感情も持てない」「命に限りがあるからこそ、一生懸命がんばれたり今という時間を大事にしたりできる」「苦しいことや悲しいことがあるからこそ、少しの幸せもとてもうれしく感じる」「月の世界は、苦しくないかも知れないが、幸せと感ずることもないと思う」等があり、特に、「感情がある地上の世界」に目を向けて述べられた意見が多かった。ここでは、「月の世界」の設定に目を向け、二つの世界を比較しつつ考えることで、改めて「地上の世界」にある「人間の感情」の意味やその良さを言語化し、再確認するに至った。

### 発問③

「当時の人にとって、『月の世界』とはどのようなものだろうか。」

「地上の世界」の良い点について改めて確認した後、なぜ「月の世界」が前述のような世界に設定されたと思うか問うた。以下は、生徒のワークシートの記述である。

- ・人や環境はきらびやかで、魔法がある月の世界は平安時代の暮らし(世界)と違ってなんでもできるので、昔の人たちが憧れる存在。
- ・昔は貧しかったりして生きることが困難だったので、生まれ変わりたいと願ったりしたのかもしれない。苦しい生活を送っていた地上の世界の人々は、月の世界を理想的なものだと考えたと思う。
- ・地上の世界の苦しみから逃れるための幻の世界。
- ・不思議な力をはたらく、不老不死で、光り輝く美しい一度は憧れるような理想の世界。しかし、そんな世界で一生暮らすのなら、物思いがあつて、思い悩むこともあつて、

感情があるこの地球の方が、生きる目標を持つことがたやすくよいと思つていると思う。月は、光輝く美しい素晴らしい世界だが、同時に心配することも愛もなく、不老不死の人生の中で生きる意味を見失うことがある世界でもあると考えていたと思う。

- ・年老いたり死んだりすることがないからうらやましい、夢のような場所。
- ・地上は病気や争いが絶えなく、生きづらい世界だったから、きれいに輝く月を見て、病気や争いが無い世界であつてほしいと願っていた。

苦しいことがあつても、自分たちが生活するのは地上の方がいいと考えていた生徒たちだが、ではなぜ、そのような世界を「月の世界」に設定したのかと問うことで、当時の生活に思いを馳せ、その意図を考えたようである。平和とは言えない当時の生活において、月は憧れや理想が投影された場所であつたのではないかと推測している生徒もいた。

### 2.4.2. 2つ目の問いについて(第4時)

第4時では、5人の貴公子のエピソードについて考えた。この場面は、単なる失敗談としても面白く読めるが、違う視点から物語を捉えさせたいと、5人の人間性に目を向けさせた。まず、それぞれのエピソードについて、教科書の解説や国語資料集を読み、内容を確認した。その上で、「5人の姿から見えてくる人間の姿」を考えさせた。

この活動も小グループを活用し、それぞれの人物が失敗した原因や、足りなかったことなどを挙げさせ、そこから共通点を考えさせた。個々の人物の具体的な例を抽象化させる活動である。グループの意見を全体で確認すると、「自分の欲を優先し、悪知恵を働かせる自分勝手な姿」「自分の欲しいものを手に入れるため、ずるをする醜い人の姿」「先のことを考えずに行動する浅はかな姿」「自分の都合に合わせて卑怯なことをしてずる賢い姿」等、人間の醜い姿に視点が当てられている。また、そのような姿をよしとしない思いから、「月の世界」を理想郷とした設定が生まれたのではないかと考えた生徒もあつた。

### 2.4.3. 3つ目の問いについて(第5時)

第5時では、別れの場面におけるかぐや姫と帝の心情を考え、全体で意見を共有した(図2)。まず、かぐや姫が「心異になる」前に伝えたかったことは何かということを問うた。この問いにより、翁や姫に対する感謝や帝に対する説明など、周りの人に対する感情がかぐや姫の心に生じていることを確認した。地上で生活するうちに、様々な思いを持つようになり、感情を忘れることを恐れているのではないかと考える意見も出された。

続いて、帝が不死の薬を焼かせた理由を問うた。「かぐや姫がいないのに長生きする意味がない」「かぐや姫がいないまま、長生きしたくない」「かぐや姫がいない悲しみをずっと持ち続けるのは嫌だ」等、かぐや姫がいなくなったことに対する深い悲しみや、かぐや姫への深い愛情を確認することができた。

その上で、なぜ地上の世界に来ることが罪を償うことになるのかという質問を投げかけた。生徒は、これまでの学習で、人間の感情に着目して「竹取物語」を読み進めてきた。そこから、感情のない月の世界の人であるかぐや姫にとって、人間の醜い心を知ること自体が罰であったり、周りの人に対して抱いた気持ちをすべて忘れなければならないつらさが罰であったりするのではないかと考えていった。答えが明確に示せる問いではないが、これまでの学習を踏まえて、自分たちなりに様々な考えを広げつつ考えることができたのではないかと推察される。

## 3. 結果と考察

授業後、「『竹取物語』が千年もの間語り継がれてきた理由」を考えさせた上で、改めて「竹取物語」の面白さについて記述させた。

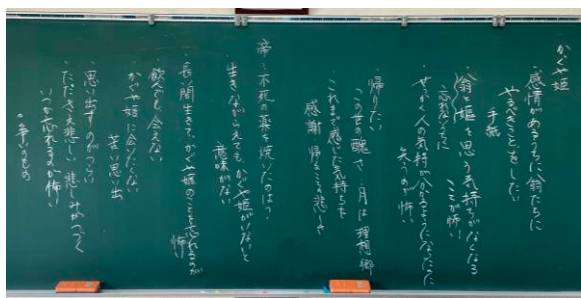


図2 共有した別れの場面のかぐや姫と帝の思い

図3は事前アンケートの「かぐや姫」の面白さと事後アンケートの「竹取物語」の面白さの自由記述の内容を分類し、比較したものである。実践を行う前、生徒が「かぐや姫」の面白さとして挙げた項目として多いのは、図中の①「ファンタジー的要素」で、かぐや姫が竹から生まれて月へ帰るといような、非現実的な設定の部分である。これが、実践後は3分の1程度に減り、反対に⑪「人間の姿・感情」、⑩「様々な解釈」、⑥「月の世界の設定」が増えている。生徒の記述には、以下のようなものが見られた。

#### ⑪「人間の姿・感情」

- どの時代にも通じる「感情の豊かさ」について考えさせられるところ。

- 現実ではない設定で、5人の貴公子たちなどの悪い感情や翁たちの優しいところなどの人間の感情を教えてくれる。生きていくための感情の教訓で読んでいて、人間のいろいろな気持ちの面を知ることができる。

- 人の良い面と悪い面が書かれていて、それで興味が湧くような夢のような世界と地上の世界の違いも物語に入れていて、興味や好奇心を持ちながら読める。

#### ⑩「様々な解釈」

- 答えが決まっているのではなくて、深く解説されていないところを、自分で想像したりしながら読むことができる。

- 直接作者の伝えたいことが書かれておらず、5人の貴公子の話や月の世界を想像して、作者の伝えたいことを考えるところ。

- 地上の世界であるたくさんのお話を通してのかぐ

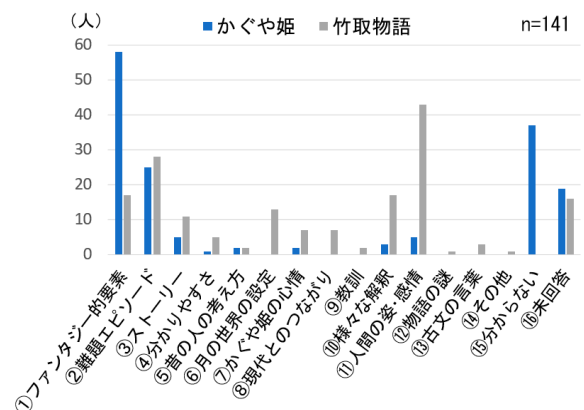


図3 「かぐや姫」と「竹取物語」の面白さの比較

や姫の心の成長。恋愛やファンタジー、人間の感情などいろいろなものが入っていて、子供と大人で楽しめるところが違う。(成長すると見方が変わるため長く読まれている。)

- ・人間の悪いところをストーリーにして、遠回しに言っているという、捉え方によっては違ってくる。

⑥「月の世界の設定」については、不死の薬や不思議な力を持っていることに対しての面白さを感じている記述が見られた。

第3時は、月の世界と地上の世界の違いを考える中で、地上の世界に特徴的な「人間の感情」に着目することができた。第4時では、貴公子たちの自己中心的な醜い人の姿から、負の感情について考えた。さらに、第5時でかぐや姫や帝の心情を考えたことで、生徒たちは負の感情を凌ぐ人間の美しい心のすばらしさに着目した。

このように、「人間の感情」を軸に「竹取物語」を読み解くことで、これまで現実離れした昔話だったものが、様々な人間の姿を学ぶものであったり、自分たちの住む世界の良さを再認識させるものであったりと、現代の私たちにも通じる物語へと変わっていったようである。そして、見方を変えることで、様々な解釈ができる部分に面白さを感じることがうかがえる。⑧「現代とのつながり」に触れた生徒の記述では、「今の自分の状況や居場所について、改めて考えさせられるところが面白い。昔の考え方が身近に感じられるのがすごい。」とあった。この記述からは、自分たちの生活や感情などを古文の読み取りに生かし、自由に想像したことで様々な解釈ができ、その中で、古文の世界にも思いを馳せていることがうかがえる。

このように、非定型の問いを設定し、表現の意図や設定の意図などを問うことは、批評の視点をもって文章を読むことであり、既存の知識や体験を生かしながら多面的に考えていくことにつながったと言える。そして、千年以上も昔に書かれた

文章ではあるが、自分たちの感情や生活と変わらない部分を感じとり、現代においても面白さを見いだすことのできる活動になったのではないかと考えられる。

#### 4. まとめと今後の課題

今回扱った「竹取物語」は、古典学習の入門期に扱われることが多く、古典に親しむという目的を達成するため、現代語訳や解説部分を多く扱った。しかし、最終的には古典の文章や表現にも着目し面白さや魅力を見つけていくべきであろう。今後は、より古典の特徴的な部分に着目した授業の構成を考えていきたい。

#### 参考文献

- 朝川明日香. (2016). 月が照らす『竹取物語』の可能性－「月」に着目した『竹取物語』の指導. 信大国語教育巻 26, pp.13-26
- 上川寛子. (2021). 古典に親しむためのアプローチ. 鳥取大学附属中学校研究紀要 No.53. pp.13-18
- 竹村信治. (2002). 翁の物語としての『竹取物語』“「古典」に親しむ”ために. 国語教育研究 (45). pp.68-81
- 坂東智子. (2010). 自己との関わりを意識化する古典学習指導の考察－大村はまの単元学習指導「古典入門－古典に親しむ」(昭和 25年)を中心に－. 教育実践学論集 11. pp.83-95
- 藤村宣之・橋春菜・名古屋大学教育学部附属中・高等学校(編著). (2018). 協同的探究学習で育む「わかる学力」－豊かな学びと育ちを支えるために－. ミネルヴァ書房. 230pp.
- 細田広人. (2021). 中学校における古文・漢文と現代的視点との総合化による「竹取物語」の授業. 人文科教育研究第 48 号. pp.265-278
- 文部科学省. (2017). 学習指導要領解説国語編. 開隆堂